令和２年度　学位記授与式　式辞

本日、学部を卒業し学士の学位を得た 914 名、大学院博士前期課程及び修士課程及び専門職学位課程を修了し、修士及び教職修士の学位を得た 205 名、大学院博士後期課程を修了し、博士の学位を得た９名の皆さん、学位取得おめでとうございます。本日、本学から皆さんを卒業生、修了生として送り出せることを、列席しております理事・副学長、学部長、事務局長および教職員とともに、心よりお祝いいたします。

また、ご多用のところ、卒業生の門出となるこの式にご臨席を賜りました和歌山県知事　仁坂吉伸様、和歌山市長　尾花正啓様、本学同窓会会長　西川昌克様には、衷心より御礼申し上げます。

昨年の 1 月に日本で初めて感染者が確認された新型コロナウイルス感染症は、社会に大きな変化をもたらしています。本学においても、感染拡大防止の観点から、キャンパスへの入構制限や遠隔授業の実施など、皆さんの就学環境に大きな影響を与える対策を取らざるを得ませんでした。このために、卒業・修了への最終学年となっていた皆さんには、これまでにない不便をかけてしまいました。しかし、このような困難を乗り越え、本日、皆さんは見事にそれぞれの学位を手にされました。ここに、学長として、皆さんの努力を労うとともに、その成果を称賛します。

一方、新型コロナウイルス感染症は未だに社会へ影響を与え続けており、その対応としてニューノーマルと呼ばれる新しい社会生活への変革が起こりつつあります。コロナ禍だけでなく、地球温暖化やエネルギー問題など多くの困難を今の社会は抱えています。これらの社会課題の解決を図るには、社会のあり方を大きく見直す必要があるでしょう。

歴史を振り返ってみますと、社会のあり方が大きく変わるパラダイムシフトは、解決が極めて困難な課題に直面した際に生じています。14 世紀のルネサンスはヨーロッパにおけるペストの大流行からの復興に端を発したと考えられています。ペストの流行が当時の教会を中心とする社会システムを破壊し、荒廃した社会・文化の復興がルネサンスでした。コロナ禍に代表される社会問題を抱えた社会は、その日常をニューノーマルという形で取り戻そうとしています。その動きの中では、ルネサンス期に様々な科学技術、そして芸術が開花していったように、多様な動きが始まり出すことになるでしょう。日本だけでなく世界的な新しい社会を作ること、そこにこそ若いエネルギーが必要になります。

論語に、「冉求(ぜんきゅう)が曰(い)わく、子の道を説(よろこ)ばざるには非ず、力足らざればなり。子曰(のたま)わく、力足らざる者は中道にして廃す。今女(なんじ)は画(かぎ)れり。」という一節があります。これは、孔子の弟子の中でも特に優れた十哲に数えられる冉求(ぜんきゅう)が孔子に、「先生の教えを学ぶことを嬉しく思わないわけではありませんが、ついて行く力がないのです。」と言ったことに対して、孔子が「力が足らなければ、進んでもそこで辞めざるを得ないかもしれない。しかし、君は今、始める前に自分で見切りをつけてしまっている。」と言って諭している一節です。この言葉は、新しいことに挑戦することを恐れてはいけないという奮起を促す言葉であり、挑戦しない態度は戒めるべきという言葉でもあります。先に述べたように、社会は新しい形に向けて動き出しつつあります。新しい社会の仕組みを生み出すには、いくつもの困難を乗り越えなければならないでしょう。皆さんは、和歌山大学での学修により、多くの力を身につけています。臆することなくその力を存分に発揮し、新しい社会の礎を築く取り組みに積極的に参画してください。皆さんには社会を変革する十分な力が備わっています。困難に直面し諦めてしまいそうになった時には、自分で自分をこれまでの枠にはめてしまっていないか、自分の能力を十分に発揮できているかを自問し、この言葉を思い起こしてください。「今女(なんじ)は画(かぎ)れり」。

和歌山大学を卒業・修了し、社会に初めて出る皆さん、そして社会人として和歌山大学で学び直した皆さん、本学で得た知識と技能、そして同級生、同窓生とのネットワークを存分に活かし、この困難な時代を新しい輝く時代に変えてください。社会変革の柱となって皆さんが活躍されることを期待します。

令和三年三月二十五日

和歌山大学 第十七代学長　伊東千尋